

下記の記事は、翻訳ソフトを使い、編集したものです。山根和代

核実験体験者への数十年にわたる影響を伝える悲惨な話

ジミー・エリンガム

2021年6月12日

<https://www.stuff.co.nz/national/300330166/harrowing-stories-reveal-decades-of-fallout-for-nuclear-test-veterans>

掲載：stuff (スタッフ紙)

Harrowing stories reveal decades of fallout for nuclear test veterans

By Jimmy Ellingham Jun 12 2021



HMNZS(ニュージーランド海軍の補助艦艇)プカキから見た、地平線上にそびえる核爆弾のキノコ雲

1950年代後半、太平洋上で行われた英国の核実験に、500人以上の若いニュージーランド人水兵が知らず知らずのうちに立ち会っていた。ジミー・エリンガムは、その場に居合わせた3人の男性に話を聞いた。

彼らは次々と自分の子供の癌や先天性障害について語った。

クリスマス島で行われた水爆実験「グラップル作戦」の40年後、HMNZS ロトイティとプカキという2隻のフリゲート艦に乗ったニュージーランド人が目撃した話は、悲惨で耐え難いものだった。

パーマストンノースの海軍退役軍人ロイ・セフトン氏を中心となって設立した「ニュージー

ランド核実験退役軍人協会」の黎明期である。

続きを読む

* [Nuclear test veterans encouraged quest for apology will succeed](#)

* [New Zealand's nuclear horror still not acknowledged say vets](#)

* [Nuclear test veterans seek audience with prime minister over family health problems](#)



DAVID UNWIN/STUFF

1月に行われたロイ・セフトン氏の葬儀で、RSA 福祉担当のマイク・オコナー氏からポピーを受け取る退役軍人のテレ・タヒ氏（中央）、クライヴ・ストリケット氏、マイケル・トゥーマス氏。

市の帰還兵協会の家では、グラップルの船員たちが実験の後遺症の話をしていました。

「人々が病気であることは知っていました。どの程度の病気かは知りませんでした。何世代にもわたって病気になっているとは知りませんでした」とプカキのベテラン、クライヴ・ストリケットは言った。

「本当に心が折れそうになりました」。

セフトンは、退役軍人に妻や子どもを連れてくるように言った。彼らは、流産や、ひどい場合には手足のない赤ちゃんが生まれたことなどを話してくれた。

「ストリケットは、自分たちが受けた放射線の影響の大きさを実感した瞬間を覚えていません。」

「みんな泣いていました。あまりにもひどい状態でした。何とかしなければならないと思い

ました」。

1990年代後半、プカキの船員仲間であるジョン・パーセルは、昔の仲間やその家族がどのような状況に置かれているかを知ったときでもあった。

「話をしていた人が咽頭がんになってしまったんです。ひどい状態だったんだ。」

「私はそこに座って、メンバーやその家族が抱えている他の障害について聞いているうちに、突然、自分にも話すべきことがあると気付いたのです」と語っている。



プカキの船員たちは、爆風から顔をそむけるように言われ、数分後に振り向くだけだった。

世界を見るチャンス

1950年代の若者にとって、海軍は故郷を離れて旅をするためのチケットだった。

スティケット（86歳）は若くして学校を辞め、農場で働き、自分には向いていないと判断して入隊した。

朝鮮半島やマレーにも出征し、エリザベス女王とフィリップ王子の戴冠式の凱旋公演にも参加した。

1958年、プカキ号の乗組員には命令が下され、太平洋に向けて出航した。そこで乗組員たちは、気象データの収集と英国の野外核実験の観察を行うことを知らされた。

マイケル・トゥーマスさん（82歳）が乗船したのは、まだ17歳のときだった。英連邦が主導した南極大陸横断のためにエドモンド・ヒラリー卿を護衛する船に乗り、王室ツアーにも参加してチャタム諸島などで陛下を護衛した。

ラッセルでは、トゥーマスが女王とエディンバラ公を町に迎え入れる衛兵の一員となり、エリザベスは彼が町の要人ではないことに気づくまで握手をしそうになったという。

「エリザベスは、彼が町の要人ではないことに気づくまで、彼と握手しそうになった。忘れられません」。

1958年、トゥーマットはプカキ号にも乗っていた。彼によると、乗組員は実験場に80マイル（128キロ）以上近づかないように言われていたという。

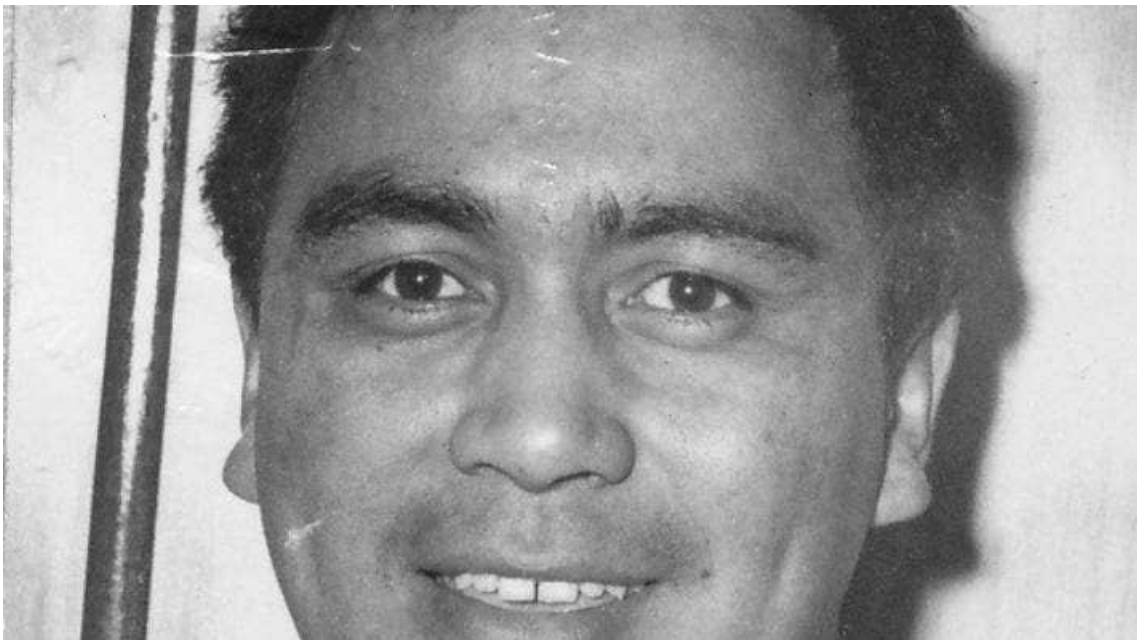
ストリケットさんと同様、トゥーマスさんも核実験や放射線の影響について何も知らなかった。

パーセルさん（81）が海軍に入隊したのも17歳の時だった。

「海軍に入隊したのは17歳の時で、「冒険するには絶好の機会だと思った。「私はまだ若く、ホークスベイを越えて旅行したのはギズボーンに行った1回だけだった。ニュージーランド以外の国に行ったこともありませんでした」。

彼は冷凍庫で働いていたが、毎日時計を見ながら仕事をすることは考えられなかった。

1958年半ば、プカキ号の海上で、核実験の目撃者になることを知ったパーセルは、不安を感じなかった。"まるで冒険のようだった"。



1965年、ジョン・パーセルさん。太平洋実験を見た後、彼は体調を崩し、重度の障害を持つ娘を授かった。

フォールアウトゾーンで

1958年8月から9月にかけて、インドネシアの南にあるクリスマス島で5回の核実験が行われた。

ストリケットは3回見たが、そのうち2回目の爆発は巨大で、広島の20倍はあったと言う。

「巨大な爆発だったのです。太平洋上に巨大な蒸気雲が発生したので、それを監視しなければならなかった。蒸発するまで監視しなければなりませんでした。」

「蒸発するのに何日もかかったので、私たちは長い間、その雲の下にいたのです。」

雨が降った。激しい雨だ。プカキの塩水コンデンサーに問題が発生したため、洗濯や飲料用の雨水を集めるために日よけが設置された。これにより、乗組員はより多くの放射線を浴びる可能性があった。

ストリケットは、爆発はすごい光景だったが、恐ろしかったと記憶している。美しい、とも言われた。「絵のように美しかったが、私には合わなかった。楽しんだとは言えません。心の準備ができていなかったのだと思います。」

船員たちは、ズボンを靴下に入れて、目を隠すように言われた。甲板にいる人たちは、爆心地に背を向けて座って待っていた。

"そうしたら、爆弾が爆発してしまったんだ。手の中の骨が見えたんだ。怖かったよ」。

その2つ目の大きな爆弾のために、2分後に男性は目を開けて爆発の方を見るように言われた。

"目の前にあったんだ...。巨大だった。"

パーセルは4つの実験を見た。小規模なものが2回、大規模なものが2回で、それぞれ80万トンと100万トンのTNTに相当した。

防護服といっても、ズボン、帽子、手袋程度のものだったという。

「これが爆風に対応するためのユニフォームだと思っていた」というほど古臭いものだった。

"最大の爆発は、巨大なキノコが登ってきて、地平線全体を覆ったんだ」。

また、パーセルさんは、爆風に背を向けて座り、海軍士官が1から40まで数える中、爆風を待っていたことも覚えている。

「爆発音は遠くに響いていた。そして、背中に熱を感じた」。

また、手の骨が見えたことも、グラップル経験者に共通する記憶である。「それが一番大きな思い出だよ」。

トーマスは、2、3回の爆発の際に甲板の下にいた。最近になって、ボイラー室が外の空気を吸っていたため、最悪の場所だったかもしれないと知った。

しかし、当時の彼は安全だと感じていた。

「私がボイラー室にいたのは、そのうちの1回だけです。あれが一番大きかったと思いま

す。あそこはかなり暑かったですね。はしごの手すりにも触れられないほどの熱さでした」。デッキの上では、プカキ号が稲妻と雷を伴った巨大なキノコ雲に向かって航行しているのが見えたが、「心配するな」と言われた。

「私たちはまだ若く、無邪気だった。冒険をしに行ったんだ」。



核実験を前に甲板で待機するプカキ号の乗組員たち。

核実験の余波

パーセル氏は、海軍で 8 年半過ごした後、ネイピア刑務所の責任者を務めるなど刑務官になった。彼の病気のリストは相当なものである。細かいことは言いたくないが、癌も含まれているという。

パーセルさんは健康上の理由で退役軍人年金をもらっているが、苦勞して手に入れたこうした支援は、退役軍人の子供や孫には及ばない。

1966 年、パーセルさんの娘リネットは、心臓に穴があいた状態で生まれ、脳性麻痺を患っていた。彼女は支えのない状態で座ることができず、40 代半ばで亡くなった。

パーセルはネイピアに住み、RSA の会長を務めている。

トゥマスは 1964 年に約 9 年間、林業、酪農の仕事に従事した後、退職した。

疲労、ストレス、関節痛などに悩まされてきたが、特に農場での作業では疲労感が一番ひどかった。

グラップル作戦の前に生まれたシェリーと、後に生まれたウェンディという 2 人の娘がいる。

ウェンディは、子どもに欠陥がある可能性があるため、子どもを産まないように勧められて

いたので、トーマスは「奪われた」と感じていた。

トーマスとグラディスは、ハミルトン近郊の1.6ヘクタールの土地に、4匹の猫と6匹の犬（いずれも引退した 그레이ハウンド）とともに暮らしている。

ストリケットさんは、自分と家族は他の人に比べて幸運だと思っているが、彼自身も健康面での戦いに直面している。

1961年に海軍を退役した彼は、健康な若者として、食肉業界で動物の死骸を移動させる仕事をしてきた。1990年代後半、オークランドで働いていた彼は体調を崩し、ランチに出かけると食べ物を喉に詰まらせた。やむを得ず外に出て、庭で嘔吐した。

"酔っぱらいの....."と、通りすがりの男性が不当にも言った。

ある日、彼が農産物の配送トラックを運転しているときに、それが頭をもたげてきた。バナナを食べたが、またしても窒息しそうになり、車を停めた。通りすがりの警察官が助けに来て、救急車を呼んでくれた。

ノースショアの専門医であるマイケル・ブースは、シドニーの専門家に相談して、「活力性アカラシア」と呼ばれるこの症状を解決してもらった。

「私の喉はすぐに縮んでしまいました。飲み込むこともできず、食べることもできませんでした。」違和感のあるチューブを使って食べ物を送り込んだが、ストリケットさんには手術が必要だと判断された。

喉から胃までの食道を分割し、萎縮した組織を削り取るという複雑な手術であった。1年後、彼は同じ手術を受けることになったが、今度は背中から手術をした。

ストリケット氏と妻のフェミーは、オークランドからワイカトへと引退した。当初は別の手術が予定されていたが、医師は代わりに胃にバルブを挿入し、そこから栄養を供給するようにした。

2009年からはその状態で生活している。「今でも水爆実験の影響だと思っています」。

彼らには3人の子どもがいるが、いずれも他の家族にはない問題を抱えている。



ジョン・カウブランド

2007年に撮影されたパーセル氏は、謝罪と退役軍人の家族への支援を求めて、退役軍人問題担当大臣に手紙を書き続けるつもりです。

謝罪を待って

核実験退役軍人協会の会長であるセフトン氏は、1月に82歳で亡くなった。1957年にロトイティ号に乗船したブルズグラップルのベテラン、テレ・タヒさんが会長を引き継ぎ、ジャシンダ・アーダーン首相との面会を決意した。

生き残っている退役軍人は約60人と推定されており、協会は、危険な目に遭った若者たちや、爆発が彼らの健康に与えた影響について謝罪を求めている。

また、退役軍人の子どもや孫のための研究や医療支援を求めている。

協会の会長であるアル・ローランド氏は、退役軍人とその家族に長期的な遺伝的ダメージがあることを発見した研究に携わったマッセイ大学の元学者だが、ニュージーランド政府や英国政府を納得させるには十分ではなかった。

退役軍人省のウェブサイトによると、英国当局はリスクを最小限に抑えるための手順を用意していたという。

"予防措置は、その時点で入手可能な最善の知識に基づいていました。"と。



DAVID UNWIN/STUFF

長年、核実験退役軍人会の会長を務めたロイ・セフトン氏が1月に亡くなった。

トーマスさんは、退役軍人の子や孫への支援は重要であり、世代を超えた放射線被曝の影響を理解することも重要で、そのための研究をしてほしいという。

ストリケットさんは、賠償金はいらないが、謝罪はしてほしいと言っている。

トーマスと同様に、政府がグラップル退役軍人の子孫に関する調査に資金を提供し、英国政府に若い船員の命を危険にさらしたことが間違っていたと認めるよう働きかけてほしいと考えている。

パーセルさんは、最近の退役軍人問題担当大臣であるメカ・ワイティリさんにも、前任者と同じように手紙を書くつもりだという。

「私が受け入れがたいのは、これらの若い少年たちがモルモットのように扱われるために政府に引き渡されたことを王室が認識していないことです。」

「もし実験が安全ならば、なぜイギリスは自国で実験を行わなかったのか？」

「私たちが求めているのは、すべての海軍の核実験を体験した退役軍人とその家族に対する扱いについて、公式に謝罪することだけです。難しいことはありません。」

パーセルとトゥーマットは、8月までパーマストン・ノースのテ・マナワ・アート・ギャラリーで開催されている写真展で紹介されている。

この記事は自分で書いたものではありません。

スタッフのニュースを作るには、生身の人間、厳しい電話、居心地の悪い戸締り、忙しい張り込み、複雑なデータセット、高性能なカメラ、技術者、猛烈なタイピングなど、さまざまなものがが必要です。

だからこそ、皆さんには目だけではなく、Stuffをサポートしていただきたいのです。

もし私たちのニュースがあなたの心に響き、あなたの世界を理解する助けとなり、あなたの周りで起こっていることを知らせてくれるなら、ぜひ寄付を検討してください。

あなたに代わって、私たちが記事を書き、質問をし、電話をかけ、撮影し、出版し続けるための支援をお願いします。

以下は原文です。

Harrowing stories reveal decades of fallout for nuclear test veterans

Jimmy Ellingham 05:00, Jun 12 2021



SUPPLIED

The mushroom cloud of a nuclear bomb rises on the horizon, viewed from HMNZS Pukaki. *More than 500 young Kiwi sailors were unwitting witnesses to British nuclear testing in the Pacific in the late 1950s. Jimmy Ellingham talks to three men who were there.*

One by one they spoke of cancers and birth defects in their children.

Four decades after Operation Grapple, hydrogen-bomb tests off Christmas Island witnessed by New Zealanders on two frigates, HMNZS Rotoiti and Pukaki, [the stories were](#)

[harrowing](#) and the suffering unbearable.

広告

It was the early days of the New Zealand Nuclear Test Veterans' Association, created through the efforts of navy veteran Roy Sefton, from Palmerston North.

READ MORE:

* [Nuclear test veterans encouraged quest for apology will succeed](#)

* [New Zealand's nuclear horror still not acknowledged say vets](#)

* [Nuclear test veterans seek audience with prime minister over family health problems](#)



DAVID UNWIN/STUFF

Nuclear veterans Tere Tahī, centre, Clive Strickett and Michael Toomath take poppies from RSA welfare officer Mike O'Connor at Roy Sefton's funeral in January.

At the city's Returned and Services' Association home, Grapple sailors shared their stories of the tests' after-effects.

ADVERTISEMENT

[Advertise with Stuff](#)

"I knew people were sick. I didn't know how sick. I didn't know about the generations," says Pukaki veteran Clive Strickett.

"That really broke me up."

Sefton told veterans to bring their wives and children. They told stories of miscarriages and, in extreme cases, babies born with missing limbs.

"There wasn't a dry face in the place," Strickett says, remembering the moment when the terrible effects of what they were exposed to hit them.

“Everyone cried. It was so terrible. We decided that we’ve got to do something about this.”
That gathering in the late-1990s was also when fellow Pukaki sailor John Purcell learned what his old mates and their families were going through.

“A person speaking had throat cancer. He was in terrible trouble.

“As I sat there and listened to all the other disabilities that our members and their families have had, I suddenly realised that I had a story to tell as well.”



SUPPLIED

Pukaki sailors were told to face away from the blasts, only turning around after a couple of minutes.

A chance to see the world

To young men of the 1950s, the navy provided the ticket to travel outside the confines of their homeland.

Stickett, 86, left school young, worked on a farm, found it wasn't for him, and signed up.

ADVERTISEMENT

[*Advertise with Stuff*](#)

He served in Korea and Malaya, and was involved in Queen Elizabeth and Prince Phillip's triumphant coronation tour.

In 1958, the Pukaki crew was given its orders and off it sailed to the Pacific where the sailors were told they would be collecting weather data and observing British open-air nuclear tests. Michael Toomath, 82, was just 17 when he signed on. He was on a ship escorting Sir Edmund Hillary to Antarctica for the Commonwealth-led efforts to cross the continent and was also involved in the royal tour, escorting Her Majesty to the Chatham Islands among other places.

In Russell, Toomath formed part of the guard that welcomed the Queen and Duke of Edinburgh to the town, and Elizabeth almost shook his hand before realising he wasn't a town dignitary.

"That was as close as I got to the Queen. I'll never forget it."

In 1958, Toomath was also on the Pukaki. He says the crew was told it would go no closer than 80 miles (128 kilometres) to the test sites.

Like Strickett, Toomath knew nothing about nuclear tests and the possible effects of radiation. Purcell, 81, was also 17 when he joined the navy.

"It sounded like a great opportunity for some adventure," he says. "I was very young and had only travelled beyond Hawke's Bay once, and that was to Gisborne. I'd certainly never travelled outside of New Zealand."

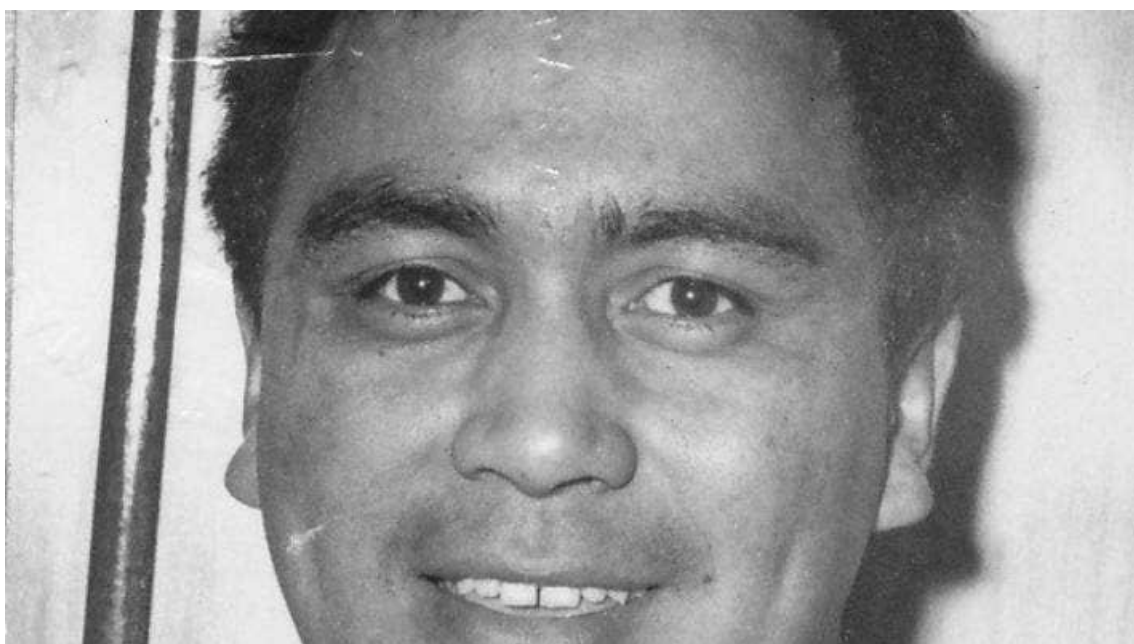
He was a freezing worker, but couldn't see himself watching the clock every day.

ADVERTISEMENT

[Advertise with Stuff](#)

At sea on the Pukaki in mid-1958, Purcell found out they were to witness nuclear tests, but wasn't concerned.

"It was like an adventure."



SUPPLIED

John Purcell, in 1965. Since viewing the Pacific tests he's suffered bouts of ill-health and had a daughter who lived with severe disabilities.

In the fallout zone

In August and September 1958, there were five nuclear tests off Christmas Island, south of

Indonesia, as Britain looked to match the arsenals held by the United States and Soviet Union. Strickett saw three, the second of which was huge, 20 times bigger than Hiroshima, he says.

“That’s a huge explosion. That created a huge vapour cloud across the Pacific we had to monitor. We had to monitor it until it evaporated.

“It took days and days to evaporate, so we were under that cloud for a long time.”

It rained. Hard. Pukaki had a problem with its salt water condenser, so an awning was put up to collect rain water for washing and drinking. This potentially exposed the crew to more radiation.

Strickett remembers the explosions as horrific, although they were an amazing sight. Beautiful, some said.

“It was picturesque, but it wasn’t for me. I can’t say I enjoyed it. I don't think we were prepared for it.”

Sailors were told to tuck trousers into socks and cover their eyes. Those on deck sat with their backs to the detonation zone and waited.

ADVERTISEMENT

[*Advertise with Stuff*](#)

“We did that and the bomb went off, and that was it for me. I could see the bones in my hand. It was scary.”

For that second, big bomb, after two minutes the men were told to open their eyes and look towards the blast.

“It was right in front of us... It was huge.”

Purcell saw four tests. Two smaller ones and two big ones, equivalent to 800,000 tonnes and 1 million tonnes of TNT, respectively.

Protective clothing wasn’t up to much, he says – a pair of trousers, hat and gloves.

“It’s so archaic they thought this was the uniform that would assist us with the blast...”

“The biggest blast was a huge mushroom that climbed. It took up the whole horizon.”

Purcell also remembers sitting with his back to the blasts, waiting for them to explode as naval officers counted from one to 40.

“The explosions were rumblings in the distance. Then you felt the heat on your back.”

He also saw the bones of his hands, a common memory of Grapple veterans. “That’s the biggest memory I had, really.”

ADVERTISEMENT

[*Advertise with Stuff*](#)

Toomath was below deck for two or three explosions. In recent years he's learned that may have been the worst place to be, as the boiler room sucked in air from outside.

“We had all the radiation coming down.”

But at the time he felt safe.

“I was in the boiler room for one of them. I think that was the biggest one. I know it got pretty hot down there. It was that hot I couldn’t even touch the handrails on the ladders.”

Above deck he saw the Pukaki steaming towards a huge mushroom cloud full of lightning and thunder, but was told not to worry.

“We were just young, innocent. We were up there for adventure.”



SUPPLIED

The crew on Pukaki waits on deck ahead of a nuclear test.

The aftermath

Purcell spent 8½ years in the navy before joining the prison service, including being in charge of Napier Prison.

His list of medical ailments is substantial. He doesn’t want to delve into the detail, but it includes cancer.

Purcell gets a war veterans’ pension because of his health, but such support, which was hard-won, does not extend to children or grandchildren of veterans.

In 1966, Purcell’s daughter Lynette was born with a hole in her heart and cerebral palsy. She was never able to sit up unsupported and died in her mid-40s.

ADVERTISEMENT

[*Advertise with Stuff*](#)

Purcell lives in Napier, where he is president of the RSA.

Toomath left in 1964 after about nine years, working in the forestry then dairy industries.

He has suffered from fatigue, stress and joint pain, but the tiredness was the worst, particularly

when working on farms.

Purcell and wife Gladys have two daughters, Cherie, born before Operation Grapple, and Wendy, born after.

Wendy was advised not to have children because of the risk they could suffer from defects, leaving Toomath feeling “robbed”.

Toomath and Gladys live on a 1.6 hectare property near Hamilton, with their four cats and six dogs, all retired greyhounds.

Strickett considers himself and his family lucky compared with others, but he’s faced his own health battle.

He left the navy in 1961 as a fit young man and, in the butchery industry, would have to move animal carcasses.

In the late-1990s, when he worked in Auckland, he started getting sick.

He remembers going out to lunch and choking on his food. He was forced to run outside and vomit in a garden.

ADVERTISEMENT

[Advertise with Stuff](#)

“You drunken b……,” said a man passing by, unfairly.

It came to a head one day as he was driving a produce delivery truck. He ate a banana, but again started choking and pulled over. A passing policeman helped and called an ambulance. Doctors were initially baffled, before a North Shore specialist, Michael Booth, consulted an expert in Sydney for a solution to the condition, known as vigorous achalasia.

“My throat was shrivelling up fast. I couldn’t swallow. I couldn’t eat.”

Food was delivered down an uncomfortable tube, before it was decided Strickett needed operating on.

The intricate surgery involved splitting his oesophagus from his throat to his stomach and scraping off the shrivelled tissue. A year later he needed the same operation, but this time surgeons entered from his back.

Strickett and his wife Femmy retired from Auckland to Waikato. His problems returned and, after initially been scheduled for another operation, doctors instead inserted a valve into his stomach through which he is fed.

He’s lived with that since 2009.

“I still believe it came from the H bomb tests.”

They have three children, all of whom have problems other branches of the family don’t suffer from.

ADVERTISEMENT

[Advertise with Stuff](#)



JOHN COWPLAND

Purcell, photographed in 2007, intends to keep writing to veterans' affairs ministers to ask for an apology and help for veterans' families.

Waiting for an apology

Sefton, the Nuclear Test Veterans' Association's chairman, died in January, aged 82. Bulls Grapple veteran Tere Tahī, who was aboard the Rotoiti in 1957, has taken over his mate's mantle and is [determined to meet with Prime Minister Jacinda Ardern](#).

He estimates about 60 veterans survive and the association wants an apology for the young men who were put in harm's way and the effect the blasts had on their health.

It also wants research undertaken and medical help for children or grandchildren of veterans. Association patron Al Rowland is a retired Massey academic involved in research that found there was long-term genetic damage to the veterans and their families, but this hasn't been enough to convince the New Zealand or British Government.

The Veterans' Affairs website says British authorities had procedures in place to minimise risk. "The precautions were based on the best available knowledge at the time."



DAVID UNWIN/STUFF

Long-serving Nuclear Test Veterans' Association chairman Roy Sefton died in January. Toomath says support for veterans' children and grandchildren is crucial, as is understanding the effects of radiation exposure down the generations. He would like to see research into this. Strickett says he doesn't need money from a payout, but would like an apology. Like Toomath he wants the Government to fund research into Grapple veterans' descendants and for it to push the British Government into acknowledging it was wrong to risk the young sailors' lives.

Purcell says he'll write a letter to the latest Veterans' Affairs Minister, Meka Whaitiri, as he has done to her predecessors.

"What I find hard to accept is the lack of recognition from the Crown that these young boys were handed over to the Government to be treated like guinea pigs.

ADVERTISEMENT

[Advertise with Stuff](#)

"If the testing was so safe why didn't the British carry it out on their own shores?

"All we want is simply a public apology for the treatment of all navel test veterans and their whānau. That's not hard."

Purcell and Toomath are featured in a photography exhibition at Te Manawa Art Gallery, Palmerston North, until August.

This story didn't write itself. [Make a contribution](#)

It takes real humans, tough phone calls, uncomfortable doorknocks, bushy stakeouts, complex data sets, fancy cameras, tech experts, furious typing and a whole lot more to make each little

nugget of Stuff news.

None of those things come cheap, which is why we're asking you to support Stuff with more than just your eyes.

If our news connects with you, helps you understand your world, informs you on what's happening around you, please consider making a contribution.

Help us keep writing, questioning, calling, filming and publishing on your behalf.

[Become a supporter](#)